様式 6:終了時活動報告書様式

2024年1月9日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業 活動報告書

１．　業務の概要	
（１）事業名	「マダガスカル東部沿岸農漁村における住民による魅力ある地域資源の持続可能な利活用の促進」（通常枠）
（２）実施団体名	カントリーパーク新浜（環境部）
（３）実施期間	２０２２年１２月２３日～２０２３年１２月２２日
（４）実施国	マダガスカル共和国
（５）活動地域	マダガスカル共和国・トアマシナ地方アナランジルフ州フェネリブエスト県に設置されたタンプル新保護区周辺の４つの農漁村（Tanambao-Tampolo, Takobola, Rantolava, AndapaⅡ）

（６）活動概要

①活動の背景：

2020 年度採択の JICA 基金活用事業（チャレンジ枠）では、当団体による仙台市沿岸の自然との共存を目指した復興まちづくりの経験を活かし、「マダガスカル東部沿岸域農村における地域魅力教材づくり」を実施した。結果、住民により自然資源や伝統的な暮らしの魅力が発掘され、地域 MAP として住民や SNS 上に紹介された。現在は、来訪者が増えつつあり、観光地としての側面だけで開発が進められることが危惧される。住民が地域資源（身近な水辺の自然とそこで長い年月をかけて育んできた暮らし）の魅力・恩恵を再認識し、そのことに誇りを持って国内外に発信することが何より求められ、そのためには、専門家や来訪者からのその地域資源に対する高評価、といった後押しが不可欠である。今後３つの段階「Discover/価値に気づき、Enjoy/好きになり、Protect/守る」を実行し、この地域での持続可能なまちづくり（生活改善と環境保全、エコツーリズム）を推進するための交流活動を推進する。

②活動の目標：

タンプル湖周辺の水辺自然環境の保全と周辺農漁村での持続可能なくらしの両立のために、住民主体の地域案内イベント実施や観光促進を図ること。またそれを通じて、地域の自然資源の価値や魅力が、住民、観光客、関係者に再認識されること。

２．　業務実施結果

（１）実施した内容

住民が主体的にかつ持続的に地域の魅力を案内するイベントを実践できるようになるため、以下の活動を実施した。

【①案内ガイド役となる有志住民の能力強化研修】

１．ガイド役の選出：1/24 ガイド役となる住民の選考会実施。講師：ESSA*[1]教員、大学院生。
ガイドの役割について説明し、希望者に対して簡単なテストを実施。
養成するガイド人数は合計 20 名程を想定し、彼らに以下の研修会を実施。

*[1] ESSA：Ecole Supérieure des Scieneces Agronomiques / アンタナナリブ大学農学研究科。

２．日本人講師によるオンライン研修会：
2/24「まちづくり活動の手引き」講師　遠藤源一郎
5/25「海辺の暮らしと海岸林」講師　平吹喜彦
6/18「看板の製作の手引き」講師　田中ちひろ・平吹喜彦
7/18「サステナブルツーリズム（日本の事例紹介）」講師　田中ちひろ
9/28「住民によるガイド～新浜での取り組み」講師　遠藤源一郎
10/19「ガイドプログラム」講師　田中ちひろ
11/12　自然体験とベチミサラカ文化（ツァブラハ祭り）企画案の検討会

３．現地講師による研修会：
3 月「災害から身を守る」外部講師（県職員）、練習イベント実施検討会
4 月「仏英語学研修」外部講師
5 月「ビオトープ概論」「生物多様性概論」講師　ESSA 教員
6 月「ガイド技術」「薬用植物ガーデン」講師　ESSA 教員
7 月「サステナブルツーリズム（ごみの管理）」講師　ESSA 教員
9 月「ベチミサラカ民族博物館（展示の見学）」講師　国立公園職員
10 月「ガイドプログラム作り実践」講師　ESSA 教員
11 月 文化体験イベント“ツァブラハ祭り”実施検討会

【②看板設置等環境整備による地域の魅力的な資源の可視化】

１．訪問スポット整備：
ビオトープ →国立公園内の田んぼ 1 区画を所有者から借り、無農薬で米作りをすることで合意。水路と池の整備、案内看板を設置。まだ少ないが固有種の小魚（学名 *Paratilapia sp.* 現地名 fony, marakely）が自然に棲みついたことをアナランジルフ大学専門家らが確認。今後も適宜生物調査を実施し、必要に応じて種の保護を目的として固有魚の導入を行う予定。
薬用植物庭園→国立公園事務所脇に整備。適宜、枯れた植物を植え替え、新たな植物を植栽。柵を設置。全てに種名看板をつけ、解説看板を設置する予定。完成には至らなかったが、今後も適宜整備を進める。また、国立公園のガイドルートに「薬用植物の観察コース」を設け、公園内散策の前後にガーデン見学ができるようにする。

２．スポット看板整備：研修内容を反映して、住民らと必要な看板の種類、設置箇所、個数につい

て整理した。ESSA とタマタブ大大学院（ISSEDD*[2]）の学生の中から、３つの地域ごとに担当者を置き、彼らを中心に整備を進めた。
解説看板の内容については、日マ双方で確認し、意見交換して製作した。

*[2]ISSEDD：Institut Supérieur des Scieneces Environnement Developpement Durable.

★設置済み：ビオトープ、薬用植物ガーデン

★看板デザイン完成・未設置：温泉、タンプル湖、ベチミサラカ民族博物館、タンプル湖、夜行性キツネザルの観察ルート、神聖な岩

【③地域 MAP 等の地域魅力教材の製作/改善】

１．**地域 MAP** 改善：スポット看板と同様に３つの地域ごとに意見を集約した上で、ひとつにまとめた。ベチミサラカ民族博物館・神聖な儀式を行う場所を文化体験スポットとして追加した他、ヤシ自生スポット、養蜂所が追加された。MAP の改善作業まで完了しているが、看板製作と設置は予算と時間の都合でできなかった。

２. COKETES*[3]成果まとめ:保全植物の代表種タコノキ *Pandanus vandanus* のリーフレット作成。ラジオで放送された活動概要の収録。

*[3]COKETES：マダガスカルで行われた生物多様性保全に関するプロジェクト。
Conservation of Key Threatened, Endemic and Economically Valuable Species.

３．プログラムの整理：ガイドプログラムの流れと概要を共通様式で整理。６種類を作成。
自然に関連→「タンプル水辺の生き物探し」「薬用植物を見つけよう」「夜行性キツネザルを観察しよう」
文化に関連→「博物館でベチミサラカ文化体験」「ツァブラハ祭り体験」「神聖な岩をお参りしよう」

４．その他：地域の歴史や伝統的文化、水辺のある自然の魅力を紹介する冊子作成に着手。下書きは半分まで進んでいる。目下、写真や必要な詳細情報を集め、作業を進めている。

【④住民による地域ガイドイベントの実践】

１．練習イベント実践（2/28 のオンライン研修を受けて自発的に決定）:
・4/10「Tampolo Midôla」（“タンプルで遊ぼう”の意味）
・現地大型連休のパック（復活祭）期間に実施した、スポーツ主体のイベント
・来場者 308 名、うちアクティビティ参加者 54 名

⇒

県の実施許可取得に手間取り、広報がギリギリになった。
様々なアクティビティを準備したが、参加を躊躇した来場者が多かった。
事前の調整不足で、村落内の文化体験は実施できなかった。
子どもの参加者へのお菓子提供など、様々な団体から支援を得られた。
住民が不慣れで、今後も「おもてなし」の練習が必要だと感じた。
入場料・参加費を取ったが、最終的には若干の赤字だった。

※上記の反省を活かして、以降のガイドイベントが実施された。

２．ガイド実践（受注スタイル）:
・7 月「海へ向かって！ タンプル散歩」
対象：フェレリブ・エスト婦人会メンバー40 名

・10/4「フィールドスクール ～水辺の生き物探し」
対象：オーストリア人教員 5 名＋大学生 10 名
概要：４つのグループに分かれ、タンプル湖・マルフトゥチャ湖・国立公園・アンプベ池などの湿地を訪問し、国立公園職員や住民とともに生き物を採集し、同定まで行う。
・10/5「昼のお散歩コース　アンプベ湖・マルフトゥチャ湖めぐり」
対象：外国人観光客 10 名＋マダガスカル人 1 名
・10/6-7「フィールドスクール ～ベチミサラカの文化体験」
対象：フェネリブ・エスト教員養成校の小学校教員約 100 名＋指導教官 10 名
概要：４つのグループに分かれ、国立公園内の薬用植物観察とベチミサラカ民族博物館の見学。その後村落内の学校へ宿泊し、翌日は村周辺のタンプル湖と温泉を散策。
・10/16「タンプル湖と村の文化体験」
対象：VARUNA*[4] プロジェクト関係者　外国人 5 名＋マダガスカル人 10 名
*[4]VARUNA：フランス政府が実施するプログラムで、世界的なホットスポットであるインド洋西部の生物多様性損失を食い止めることを目的に、協調的な取り組みに必要な地域関係者のネットワークづくりや、経済主体間の課題の解決と関連する調査研究を促進する。
・10/28「神聖な岩をお参りしよう」
対象：ボーイスカウト　マダガスカル人 30 名＋外国人 10 名
※この他、フェネリブ・エストで実施された“世界観光デーイベント”へ参加。

３．ガイド実践（イベントスタイル）：
・11/23-25「地域プロモーション」と「伝統儀式体験 ～ツァブラハ祭り」
対象：フェネリブ・エスト周辺の観光業関係者を中心とする希望者　約 270 名
概要：①タンプル国立公園周辺のベチミサラカ文化の紹介
②訪問スポットや地域特産物に関する PR

1 日目 ＜フェネリブ・エスト市施設での展示発表＞　参加者 70 名
・ZAHA TAMPOLO*[5] の 2021-2023 成果発表 ・新規 VARUNA 事業の紹介 ・地元アーティストによる歌と踊り、特産物展示販売
2 日目＜スポット訪問＞　11 名（うち外国人 1 名）
・国立公園ルート散策:博物館、ビオトープ、薬用植物、ヤシ園等 ・ナイトサファリ：夜行性動物の観察
2-3 日目＜文化体験＞　約 200 名（県や市など地域代表者多数）
・アンダパ II 地区訪問: ・ツァブラハ（祝い祭り）の舞いと食事の体験

協力・後援：観光省現地事務所、県の観光課、市、憲兵隊、地域大学等

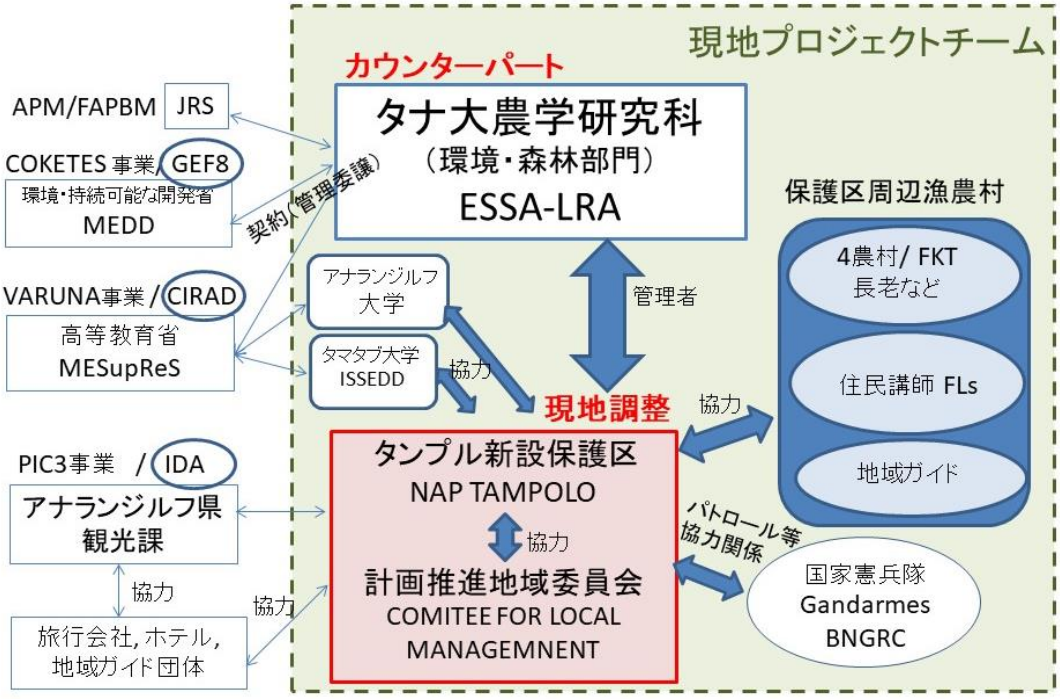
*[5]ZAHA TAMPOLO：JICA 基金 2020 をきっかけに立ち上げられた現地プロジェクトチームの団体名であり、現在は地域活性化プロジェクトの全体をさす。

【⑤地域活動の推進および持続化のためのしくみづくり】

下記の概念図を参照。

1．プロジェクトチーム：

ESSA とタンプル国立公園を中核とし、ガイドを含む技術普及のための住民講師や地域の代表者（地区長/FKT 長、長老/Tangaramena）によって構成された。



2．地元関係者との協力関係作り：

研修講師	Association AVERTEM（外国語/コミュニケーション Mr.Victor） 県広報課・海軍 BLIG（「災害から身を守る」Mr Eddy）
広報・連携推進	RADIO National、TOP Radio、観光省地方事務所、県観光課
安全管理	憲兵隊（夜間イベントの際には見回り配備など）
通信支援	Prefet
活動全般支援	アンパシナマニングリ市、アナランジルフ大学魚類学研究室、 学生団体 AJET・Totteur Antananarivo、 タマタブ大学環境・持続的開発大学院/ISSEDD

3．地域外関係者との協力関係作り：

・旅行会社 ZAHA Tours 等、首都および近隣都市の計 4 社との連携

・AFD*[6]、CIRAD*[7]等フランスの新規プロジェクトに関連するワークショップや調査の実施協力。アンダパⅡ、ラントゥラーバ、タナンバオタンプルの 3 地区で実施され、「生物多様性保全と地域開発の持続的な推進の実現に必要な地域のありかた」が検討された。

※その結果、この地域が調査研究の対象地区として選定され、今後実施されるプロジェクトでは、**エコツーリズム**・アグロフォレストリー・希少木材の管理について、住民による地域の持続可能な利活用に関する基礎調査と、その環境関連ビジネス化が検討されることになった。

*[6]AFD：フランス開発庁。Agence Française de Développement の略。

*[7]CIRAD：フランス農業開発研究国際協力センター。Centre de Coopération Internationale en Recherche Agronomique pour le Développement。

・近隣の ESSA 調査フィールドとのコラボ（物品販売やプロモーション等）

・世界銀行（国際開発協会 IDA）とマダガスカル観光省による地域振興 PIC*3 プロジェクトの研修を、当事業関係者が地域代表者と受講。当該地域でアグリビジネスと観光を振興する計画が提案され、現在、手続きの進捗を待っている。計画実施に向け、近隣の海辺地域であるフルポワント観光ガイドグループとの連携を協議中。

４．ウェブサイト活用と体制づくり：

・SNS 活用技術研修を学生が受講し、昨年立ち上げた Facebook を活用した広報を継続。

・ESSA の HP 内に ZAHA タンプルのページを作ることで大学と合意した。

（２）実施成果：

【定量的成果】

①ガイド役住民への研修実施回数　17 回（うちオンライン研修 7 回）

②ガイド役住民研修受講者数　のべ約 200 名（うちオンライン研修参加者 117 名）

③養成しているガイド人数　28 名（Local：15 名、Regional：10 名、National：3 名）

④製作したスポット看板数　８枚（うち実際に設置したスポット看板数　２枚２箇所）

⑤製作した地域魅力教材　MAP１枚とプログラム６つの２種類計７つ　※冊子は未完・編集中

⑥ガイドイベント実施回数　９回

⑦プログラムおよびイベント参加者数　のべ 809 名（うちガイドイベント参加者数 442 名）

⑧旅行会社の連携実績　４社

【成果まとめ】

全体を通じて、マダガスカル側のアクションに対し日本側がコメントや関連する研修を実施し、時間と予算の制約の中でできる範囲の改善を行った上で、成果物の製作やガイドイベント等を実施してきた。日本側の研修やコメントの内容については、「まさに知りたい内容だった」と、マダガスカル側には高評価だったようだ。一方で、養成した住民ガイドが観光ガイドの国家資格を得るには、国が定めた有料の研修を履修する必要があり、本事業中には実現できなかった。今後も独自のガイド養成研修会は継続し、マダガスカル観光省との PIC3 プロジェクト等で機会を設ける予定である。加えて、地域 MAP データの整理・検討が事業終了直前になってしまい、それに伴い「地図の読み方」研修、「大型地域 MAP 看板の設置」が未実施となった。大型屋外看板の設置が難しくとも、ガイドの際に印刷物として配布することは可能であるため、今後の活用を期待したい。以上、予定していた成果物は大方完成し、4 月の練習イベントを経て 11 月には自然と地域文化に関するガイドイベントを実施できた。よって、事業目標を達成できたと言える。

先行事業である COKETES プロジェクトと、始まったばかりの VARUNA Living Forest 事業の両プロジェクトは、「生物多様性保全を実現するための住民活動のあり方や、暮らしの改善・地域の発展との両立」を推進するための活動推進、手法の検討・研究を行うものである。「この地域は自然環境が特異な場所であり、生物多様性保全が率先して取り組まれるべきである」という基本認識と、「それは、住民の意思に基づく活動によって持続的に行われる必要がある」という基本理念は、当団体が抱いていた将来像や大切にしてきた理念と一致するものであった。本 JICA 基金活用事業の活動は、これら二大事業の挟間に位置し、時間そして活動の空白部分を埋める成果をあげることができた点で、現地にとっても大変有益だったと言える。

（３）得られた教訓など：

・プロジェクトを計画する段階では、両者で意見を交換し、目標の方向性や活動内容についてしっかり協議した。しかし、プロジェクト進行後は、これまで培った信頼関係も有り、日本側はオンライン会議や研修会で意向を提案する程度で、「何をどこまでやるのか」という進捗管理は、現地 C/P が住民らと検討・判断・実行するという展開となった。それでもなお一定の成果を得ることが出来た背景には、日本側が口出ししすぎなかったことで、彼ら自身が自分たちのプロジェクトであるという自負を持ち続け、主体的に活動を発展させたという状況がある。

　一方で日本側がタイムリーに関与できなかったことで発生した課題もある。例えば、イベントの参加費が当初予定よりも集まらず赤字になる、予定通りの成果を挙げるべく予算計画以上に活動費を支出する、といったことが発生した。当団体の予算から捻出することも難しく、赤字分は事業終了時にカンパを募って補填する対応を取った。なお、こうした実態が共有された後の対応となってしまったが、「参加希望者/団体からの受注型にしてイベントを運営する」、「地域貢献活動としての認知が明確となるイベントに関しては、計画時点から大きなスポンサーを見つけて一緒に活動する」といった、ESSA の負担を減らしなおかつガイドの機会を増やすことの実現に繋がる改善策を提案した。

・オンタイムのオンライン会議や研修会は、現地の通信環境が悪くて、やりとりが度々中断した。また、せっかく多数の住民・関係者の参加がありながら、液晶投影器やマイクがないため、多人数での情報共有や議論が難しかった。円滑かつ効果的に実施するための機器が必要であることを、終始痛感することになった。この他、デジタルで撮りためた写真や動画、作成した資料や教材を保管するストレージがない、起動するパソコンが 1 台しかない、といった物理的な活動基盤の欠如を認識した。次回は、活動開始時点で改善できると良い。

・本事業で立ち上げた Facebook 等の情報を頼りに 7 月に訪れたフランス人旅行者が、当該地域の活動の様子を目の当たりにして、自身が関わるボランティア組織やフランス大使館に連絡し、新たな支援を当該地域へ引き込んでくれたことを知った。アンダパⅡ地区で小学校の改修・井戸設置や CSB（保健センター）建設が 10 月から実施されている。SNS による広報がチャンスを生み、地域住民らの連携が支援の受け皿として機能したようだ。

・これまで日本側関係者は一人も現場へ渡航できておらず、送信されてきた画像から現地活動の雰囲気や規模感を把握するだけとなっており、もどかしさを感じている。当初は他の助成金の獲得や自己資金による渡航も想定していたが、実際には難しく、また計画が進むと現地活動が多岐にわたって活発化して予算も必要となったため、日本人の渡航は実現できなかった。現地の実態を五感で感じ取り、人々と直に交流することは今後の活動を企画し、推進するためには不可欠であると考えている。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

・彼らは次のステップとして、AFD（フランス開発庁）から支援を受け、マダガスカル高等教育省・CIRAD（フランス農業開発研究国際協力センター）等が主管する「国際的な環境ビジネスと地域の持続的開発を繋げるための新たなプロジェクト VARUNA Living Forest https://varuna-biodiversite.org/en/ 」に加わることが事業終了時点で決まっている。このプロジェクトを立ち上げるためにどのような調査・評価がなされ、またどのような仕組み・行程・活動なのか、先ずは具体的に把握する必要がある。数か月～1 年程度は現地の状況を見守り、その後、新たな情報や状況の変化に基づいて次なる活動の計画に着手したい。

・次の機会を得られた際には、国内の地域間連携を検討したいという意見があった。ESSA の調査フ

ィールドはマダガスカル国内 4 か所にあり、その 1 つにマンジャカ/ Mandraka がある。首都から国道で東方面 65km に位置し、有名な国立公園や国内最大の港町につながる道中にあるため交通量も多い。キャンプ場などの施設が整備され、野生動物も見られる。ここで ESSA は、改良かまど普及、エコツーリズム、手工芸の促進に取り組んでおり、販売組合とブティックも準備が整っている。しかし、現時点で販売する商品が乏しく、本プロジェクトサイト Tampolo 産のはちみつを出したところ売れ行きが好調で、認知度が高まっているとのこと。Tampolo に販売組織とブティックを作り、両地点の活性化を協働で取り組むことが可能かもしれない。

・一方で、今回の事業では主たるテーマとしなかったが、農業に関連した支援のニーズは住民側に常に存在する。本事業により、農薬不使用の田んぼビオトープの試みが開始された。また養蜂に適した地域であることも明らかになったが、特に販売の点では工夫が必要な状況であること分かった。当団体の活動する新浜・岡田地区でも、ニホンミツバチによる養蜂の試みが計画されている。機が熟し、技術的課題に直面しているといった状況があれば、米作りや養蜂、６次化した商品の販売などに関する技術支援を行いたい。（現地カウンターパートである ESSA は、JICA マダガスカルが推進する米増産プロジェクト PAPRIZ の技術移転の対象機関として今年度 MOU を締結しており、学生らによる農場実験も開始している。有機栽培の取り組みもあることから、こちらも注視していきたい。）

３．その他（エピソード・感想・写真など）

（１）活動中のエピソード・感想など

・カントリーパーク新浜は「農薬不使用の米作り」をおこなっているが、現地では農地を貸してくれる米農家がおり、田んぼビオトープ作りを試行的に行うことができた。環境保全と食（人と生き物の健康）に関する思いも共有できたようでうれしい。しかし反面、取り組みが失敗例として広まると、「環境配慮の農法が悪いこと」のように誤解されてしまうリスクがある。現時点では、田んぼビオトープでの生育は順調で、むしろ“農薬を使わずにいるのに雑草が少ない”と好評であるとのこと（実際は、代掻きを入念に行った結果のようだが）。事業終了後になるが、収穫量がどうなったのか報告を聞くことが楽しみである。

・田んぼビオトープの取り組みと同じ流れで、現地では 2024 年 1 月より、フランス大使館による PISCCA プロジェクト 2023-24「気候変動とその影響、及びその対策のための回復力のある女性及び関係者」の支援を受けて、主に女性をターゲットとした「改良かまどの普及と環境に優しい農業の推進」が実施されることになった。ESSA と enda MADAGASCAR（現地の生活支援 NGO）が連携し、当該地域と近隣のもう一か所（フルポワント）で行われる。女性を中核とする点は当団体の国内活動にはない視点であるため、大変興味深い。

・カウンターパートが大学の組織だったためか、アナランジルフ大学・タマタブ大学など他大学からの学生との連携が容易であり、特に案内看板や地図作りに関して、住民からの地域情報の入手や住民との調整などで活躍してもらった。またオンライン研修にも積極的に参加する様子が見られ、活動の一部は学生教育を担うことにもなった。

・VARUNA プロジェクトの資料を見て、フランスが当団体と同じような課題・手法で大きな成果をあげていることを知り、衝撃を受けた。次のステップで当団体が為すべきことを、VARUNA プロジェクトチームとの交流を通じて絞り込むことは有意義であろう。特に、２つのプロジェクトの目的・手法・成果などの違い、（並行して実施された期間内に実現した）2 回のガイドイベント等の協働活動や相乗効果については、明確に分析・評価しておく必要がある。そして、このプロセスにおいても、双方のプロジェクトを知る ESSA のクローディン氏は、重要なキーパーソンとなる。両プロジェクトの推進にしっかりと

関わりながら、適宜成果の分析・評価をし、より大きな相乗効果を上げるために進捗状況や現地ニーズに沿った外国支援のあり方について提案や進言を行う、という役割を今後も果たしてくれるだろう。

・「地球沸騰」に象徴される気候変動・激甚災害の多発とさらなる激化に対する低減・適応対策として、「居住する農村集落」を中核としながらも、海岸エコトーン（浅海・砂浜・潟湖・後背湿地）との繋がりを意識した「総合的な沿岸管理」、さらには河川・湖沼との繋がりを意識した「流域治水・流域管理」といった広域的視点に立った政策が、昨今、世界の潮流となっている。先進国の開発・土地利用政策の失敗を教訓として、住民にはプロジェクトの初期段階から、こうした視点をインプットしてみたいし、視野を持ち合わせた活動を支援してみたい。

（２）活動の写真

◆研修会の様子

◆薬用植物ガーデン

◆看板づくり　↓田んぼビオトープの看板設置

↓ツァブラハ祭りの解説看板

◆「田んぼビオトープ」

←カントリーパーク新浜の活動を参考に、創出された農薬不使用の“田んぼビオトープ”。土地所有者から無償で、田んぼの一部を借りることができた。今後は、生物モニタリングを続け、固有生物の保全に貢献できているのか検証し、整備をしていく予定。

◆「ガイドプログラム」

オーストリアの大学の学生１０名と教員５名を対象に、10 月にガイドプログラムの１つ「フィールドスクール ～水辺の生き物探し」を実施。国立公園周辺の水辺の生物を、住民らとともに調査した。↓

◆11/23 実施「地域プロモーション」

先行事業（世界銀行・MD 環境省による COKETES プロジェクト）で「地域で守られるべき自然資源」として調査・保全活動が推進された薬用植物の紹介。８種の薬用植物が展示され、タンプル湖周辺の自然や共存の歴史・文化が、地域の魅力として再認識された。↓

←イベントのちらし

「特に学生にとって、今後の就職活動に活用できる」といった現地側の発案で、当団体が“プロジェクト参加証明書”を作成した。プロジェクト名と実施期間、氏名と事業で貢献した役割を明記し、一人ずつ作成。学生だけでなく、当プロジェクトに特に協力してくれた ESSA 教員・住民らも対象として、合計 30 名ほどになった。証明書は、11/23 の地域プロモーション会場で授与された。

ATTESTATION
DE PARTICIPATION
Formateur Locale
POUR
PHILBERT
A Participé(e) au formation en Projet ZAHA Tampolo et JICA Fund <Promoting sustainable utilization of attractive local resources by residents in the eastern coastal farming and fishing villages of Madagascar> depuis le 23 DEC 2022 au 22 DEC 2023 organisée par l'association japonais "Country Park Shinhama" et Ecole Supérieure des Sciences Agronomiques, Université d'Antananarivo.
カントリーパーク新浜
Country Park Shinhama, Japon
Représentant du Département d'Environnement
ENDO Genichiro
遠藤源一郎

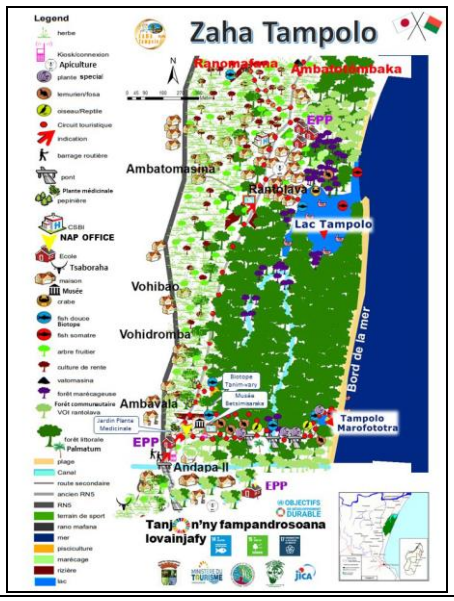
↓事業を紹介する ESSA 教員と CIRAD 関係者

会場では次なる事業計画“VARUNA Living Forest”についても発表された。↓

◆11/24-25 実施「伝統儀式文化体験ツァブラハ祭り」

←伝統儀式であるツァブラハ祭りは、憲兵隊の見守る中で 2 日目の夜間に始まった。あいにくの天気にも関わらず、地域代表者らも次々と来訪し、伝統的な踊りに参加して、場を盛り上げた。翌朝には、総勢 200 名程度になった参加者へ食事がふるまわれた。

◆地域 MAP の改善や解説看板の設置による「地域の魅力の可視化」の取り組み



←博物館・薬用植物ガーデン・ビオトープ・はちみつ販売所が加えられた地域 MAP。ライチやバニラのはちみつは希少価値もあり高値が付くことや、生産者に技術があることで順調に生産数を増やしているようだ。

ベチミサラカ民族博物館↓　はちみつ→

（３）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

・現地で取り組まれた活動、特に“イベント”は、当団体が紹介したことを参考にしつつも現地の状況を踏まえたアレンジを加えて実施された。オンラインによる情報交換であるため規模感や内容は推定せざるを得ない点が少なからずあるが、文化の違いのみならず、当団体と現地プロジェクトチームのジェンダーや年齢層の違い、熱量の差を感じた。
ジェンダーや年齢層のバランスは当団体において足りていない部分であり、新たなメンバーをリクルートしようという動きにつながっている。

・カウンターパートや住民の熱意や、先進事例（グッド プラクティス）からの学びとそのカスタマイズ化を推進する力には、刺激と教訓を受けることが少なくなかった。プロジェクトの目標達成を図りつつ、そのことを可能にする秘訣（つまり、地域社会のあり方そのもの）を探究することは、私たちの社会が抱えている諸課題をブレークスルーするためにも有益になるかもしれないと感じた。